

<b>Title</b>	中古・中世日記文学に見られる自我意識の形成
<b>Author(s)</b>	標宮子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 21(2): 275-296
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=935">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=935</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 中古・中世日記文学に見られる自我意識の形成

標 宮子

はじめに — 本研究の目的 —

一 中古中世の仮名日記の文学性について

— 「自照文学」という概念 —

二 各日記作品の自我意識について

— 個性的自我の覚醒がいかにはかられたか

I 一人称で叙述されない／叙述しない作品

各日記作品の「われ」の用法

II 一人称で叙述する作品

「我ながら」の使用例に見られる変遷

三 愛する者の喪失と自我意識の形成

・ ためしたぐひも知らぬ憂きこと（『建礼門院右京大夫集』）

— 特異性・孤絶の主張

・ 問ふにつらさ（『とはすがたり』） — いたわりで癒されない心情

四 共感への希求

おわりに

はじめに — 本研究の目的 —

聖学院大学総合研究所、グローバルゼーションの文脈における日本研究会では「日本における自他のありかた」と、それに基づく共同性の構築」というテーマの下に、共同研究を進めている。本研究はその課題を受けてなされた発表が基となっている。

筆者は日本古典文学における自他のかかわりを調べるために、自己の半生を記した日記文学に着目して、自称表現である「われ」と「われながら」という語や語句の使用例の調査を行い、作者の自我意識がいかなるものであるかを考察した。その結果各作品に著しい特徴が表れていることが判明した。そこでその使用方法の分析を行い、日記作品における自我意識が時代によってどのように移り変わったかを解明し、日本人の自我意識の形成について考究する。

一 中古中世の仮名日記の文学性について

—「自照文学」という概念—

翻訳語としての「自照文学」

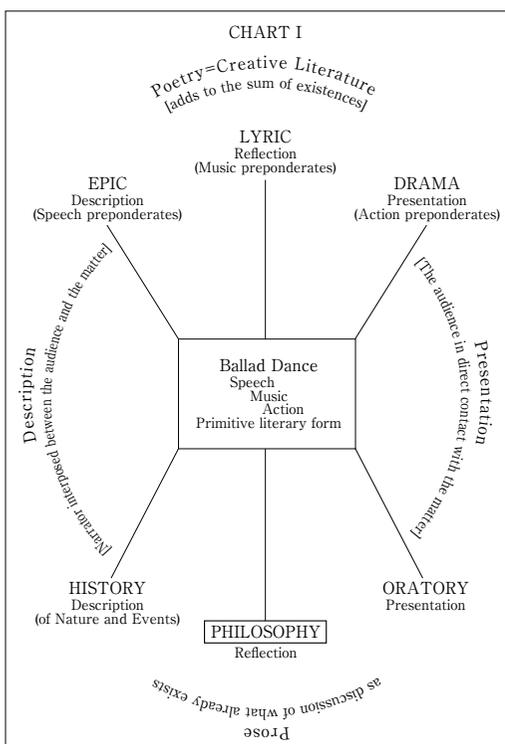
はじめに本研究が対象とする日記文学について、男性貴族が日々書き付ける備忘録としての漢文日記とどこが異なるのか、その相違点を簡単にまとめておく。それは『土左日記』を嚆矢とする文学作品で、主に女性たちの手になる回想日記を意味する<sup>①</sup>。両者の相違は、執筆者の性別の違いとともに、一方が漢文体で書かれ、一方がかな文字を使用するという文体の相違があり、また一方が事実の記録であるのに対して、また一方が自己の真実を表現しようとするという内容の相違に加えて、漢文日記は日次の記であり、仮名日記は回想による執筆という執筆の目的や執筆姿勢の相違を挙げることができよう。

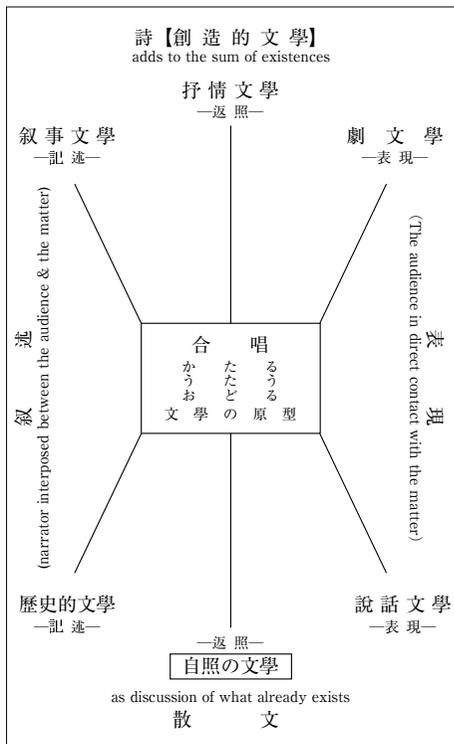
さて、平安時代の女流日記を文学として取り上げるようになったのは、垣内松三が初めてではないか、と久松潜一が記している<sup>②</sup>。それは大正六年の東京大学における講義の中のことであった。垣内松三は日記作品の文学性を自覚的に取り上げ、『徒然草』折たく柴の記『花月草紙』などとともに「自照文学」と規定したのである。

この「自照文学」という用語は、RICHARD GREEN MOULTON の THE MODERN STUDY OF LITERATURE<sup>③</sup> にヒントを得ている。モウ

ルトンはシカゴ大学の教授で、シェークスピアや聖書の文学的研究を行い、大正・昭和期の日本の文学研究者たちに大きな影響を与えた人物である。垣内松三はその著述に出会い、多くの研究のヒントを与えられた。「自照文学」はその中の、Literary morphology (文学形態論) (The Elements of Literary Form (文学形態の要素)) に出てくる Reflection の訳語である。THE MODERN STUDY OF LITERATURE は、その後垣内の影響を色濃く受けた蘆田正喜によって抄訳され、大正十二年に『文学形態論 文学形象の学的研究』<sup>④</sup>として刊行されている。次にモウルトンの文学形態論の図表と蘆田訳の対比を載せておく。

モウルトン





蘆田は文学の形態を方向付ける一要素である Reflection を表現形態として現れる PHILOSOPHY の位置に置き換えて、「自照文学」と訳出した。以後、この自照性という概念が、わが国の特に平安時代の女流日記文学作品を研究する上で、一つの重要な指標となっていく。昭和九年に刊行された藤村作の編著『日本文学大辞典』を見ると、モウルトンの文学形態論を受けて日本の随筆や日記文学を「自照文学」と定義づけた垣内の見解が反映していることがよく分かる<sup>⑤</sup>。しかし「自照文学」の概念が、単にモウルトンの Reflection にヒントを得たというだけでなく、蘆田によって、PHILOSOPHY の訳語として位置づけられたため、誤訳、あるいは不正確のそしりを免れることができず、例え

ば岡崎義恵<sup>⑥</sup>を始めとして、近年は今関敏子<sup>⑦</sup>らによって「自照文学」の概念規定がいまいであるとの理由から、その有効性自体を疑う見解も提出されている。

確かに「自照文学」という概念規定は、モウルトンの著書の翻訳としては不正確で問題をはらんでおり、概念規定が曖昧のままに使用されてきた。だが筆者は、平安時代の女性たちが自己の生涯を回想して執筆した仮名日記を、男性官人たちが記した事実の記録としての漢文日記と区別し、文学性を講究する上では、依然として重要でかつ有効な一つの指標と考えている。しかし本稿では、その概念規定それ自体を問題にするのではなく、日本の古典文学が Reflection、つまり自己を返照するという視点をどのようにして獲得したのか、そのプロセスを探り、日本の古典文学における自我意識の形成について考える糸口にした<sup>⑧</sup>。

## 二 各日記作品の自我意識について

—土左日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・建礼門院右京大夫集・とはずがたり等の比較を通して—

### 個性的自我の覚醒がいかにけられたか

平安時代の日記文学の数々が、自己の半生を振り返って、一つの作

品としてまとめられたものであり、そこには「自照精神」が色濃く表れているといわれると、当然読者は、一人称の叙述を予測する。なぜならその作品は「作者が自己の半生を見つめて記した」ものであるからである。ところが、実は平安時代の日記文学のほとんどが、一人称では記されていない。このことはすでに久富木原玲によって指摘されている。<sup>9)</sup>

冒頭部分を中心にして各作品の叙述姿勢を次に紹介しよう。

- (1) 『土左日記』 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。(一五頁)
- (2) 『蜻蛉日記』 かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、ともかくにもつかで、世に経る人ありけり。(八九頁)
- (3) 『和泉式部日記』 (前略) あやしき御車にておはしまして、「かくなむ」と言はせたまへれば、女いと便なき心地すれど、「なし」と聞こえさすべきにもあらず。(二二頁)
- (4) 『紫式部日記』 秋のけはひ入りたつままに、(以下、道長の土御門殿の描写が続き、中宮の素晴らしさに心惹かれるわが心を見つめて感想を漏らす、「われ」という自称表現は用いていない。<sup>10)</sup> また三人称的表現もしていない。)(二三頁)
- (5) 『更級日記』 あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、(二七九頁)

以上の用例でわかるように王朝の女流日記文学は、一人称で叙述されない／叙述しない作品であり、『紫式部日記』を除いて、その書き出しは「われ」ではなく、三人称的な形式を取っている。

久富木原はその理由を次のように述べている。<sup>11)</sup>

たとえ仮名で書かれたものであっても漢文日記の伝統を意識せざるを得ず、まずは三人称的な形式を装わざるを得なければならなかったのではなからうか。

しかし久富木原が指摘するように、果たして漢文日記は自己を三人称化するのが伝統であったのだろうか。その記述の多くは、「参左府：次参東宮、次参内」(『左経記』<sup>12)</sup> 長和五年正月一日条) のように主語を記さない。しかし自己の動静を明記する際には「余、予」を使用するものも少なくない。たとえば『権記』<sup>13)</sup> 正暦三年五月廿一日条には「余有所陳申」とあり、『左経記』では前掲の叙述に続いて、「余早朝退出不見後事」とあり、二日にも「余有召参内」と記す。『中右記』<sup>14)</sup> 寛治元年二月十一日条にも「予則参入、予進居座前、予而被仰予事如何、予欲指笏」とある。その他自己を卑下して「下官」(『権記』正暦四年正月一日条、『明月記』<sup>15)</sup> 治承四年六月廿七日条)、あるいは「一身依病平臥」(『明月記』治承四年二月廿六日条) などと記す例も見受けられる。確かに漢文日記には行事の記録など客観的な叙述が多いとはいえ、自己の動静は主語を明記しないか、自称代名詞か、

その他の自称表現で記していることが判明する。とすると王朝日記文学が三人称の形式をとるのは、漢文日記の伝統を踏まえているとは言いがたい。

筆者はこの三人称の叙述に着目して、この三人称の叙述こそ、個としての自我が必ずしも明確ではなかった王朝の女性たちが、貫之の仮名日記の形式と、主人公の動静を語る物語に触発されて自己を見つめる眼差し・視点を獲得していく一過程に他ならないと仮説を立ててみた。

なお本稿では『蜻蛉日記』については言及しない。いずれ稿を改めて詳述する予定である。

#### I 一人称で叙述されない／叙述しない作品

それでは一人称で叙述されない／叙述しない作品の「われ」の使用例を具体的に見ていきたい。その用法はそれぞれの作品の個性を浮かびあがらせている。

なお、当時は自称表現として男女ともに「まろ」という代名詞も使用している。しかしその用例のほとんどが会話の中で使用されており、残りは和歌に用いられている。会話や和歌での使用例は、『土左日記』の用例分析のところで説明するが、日記作者の自照表現とはなりえないので、本稿では取り上げない。参考までにその用例と使用者を注ししておく。<sup>16)</sup>

#### (1) 『土左日記』の「われ」の用例

用例総数7例（内訳 和歌6例、会話0例、地の文1例＝楫取り）  
（和歌の用例）

① しろたへの波路を遠く行き交ひてわれに似べきはたれならなく  
に（一七頁、注 歌の作者＝前の守。

以下括弧内の人物はその歌の詠者を表す。）

② 惜しと思ふ人やとまとと葦鴨のうち群れてこそわれは来にけれ  
（一九頁、見送りの人）

③ 行く先に立つ白波の声よりもおくれ泣かむわれやまさらむ  
（二三頁、見送りの人）

④ かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき  
（三一頁、ある人）

⑤ 引く船の綱手の長き春の日を四十日五十日までわれは経にけり  
（四三頁、船君）

⑥ 今見てぞ身をば知りぬる住江の松より先にわれは経にけり  
（四六頁、ある人）

（地の文の用例）  
⑦ 楫取りは、うつたへに、われ、歌のやうなる言、いふにもあ  
らず。（四五頁）

(1) の『土左日記』では、その使用例は7例、その内訳は和歌6例、地の文1例である。「われ」の用例が、和歌の中か、会話か、地の文

かの判別は、その作品の自照性の指標を考察する上で、重要な意味を示している。つまり和歌や会話の中で使用される「われ」の用例は、和歌の詠み手、あるいは会話の主をさしており、一部作者や語り手と重なることもあるが、基本的には作者ないし叙述者自身を意味するものではない。つまり和歌や会話の用例は、その作品の自照性の指標にはならないのである。具体的に『土左日記』の歌の用例では、①、②、③、④、⑤がそれに相当するが、この作品を書いているはずの「女もしてみむ」の「女」の作例は1例もない。

さらに地の文の1例(⑦)も、語り手の女性自身を示すものでなく、「自分自身、自分では」の意で、船の楫取りを指して、「楫取り自身は」という意味になっている。つまり「自分自身」「自分では」という内省的意味合いが、楫取り本人の内省から生まれたのではなく、書き手である女が楫取りの心のうちを付度し、「われ」という語を使用しているのである。ここには書き手の女(あるいは作者である貫之)自身の内省は表われてはいない。

### 紀貫之自身をさす呼称

それでは次にこの日記の実際の作者である紀貫之はどのように書かれているのだろうか。

貫之自身を指す呼称を見てみると「ある人、あまた 県の四年五年果よとせいつとせてて、例のことも皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべきところへわたる」(一五頁)と書き出され、以下、「帰る前の守(一七頁)／前の守(一七頁)／行く人(一九頁)／(返歌を)し

つべき人(二三頁)／船君(二九頁、敬意表現あり)／船の長しける翁(三二頁)」等々、その場面ごとにさまざまな呼称で呼ばれている。しかも時には「船君」のように敬意表現さえ用いている。それだけではなく、作者貫之は「ありける女童(二八頁)」になったり、また「聞く人(四三頁)」や「帰る前の守」とは別人の「ある人(一八頁他)」などになったりして、自分の分身を多くの場面に登場させている。

ここから菊地靖彦は、『土左日記』では、「全編を通して特有な個性を持った人物像を造形しようとする意図はうかがえない」と指摘する。つまり人物は、「その場面場面だけで役割を果すだけの存在で、多くの場合は歌の詠み手でしかない」<sup>17)</sup>からである。

しかしこの『土左日記』の手法は、前任の土佐の守であった貫之を「個性を持った人物」として造形することを放棄して、その代わりに貫之がさまざまな人物として登場し、そのおかれた局面でいろいろな和歌表現に挑戦する可能性を開いていることに注意を払わねばならない。それゆえ『土左日記』に「自照性」あるいは「自己返照の精神」を求めることはできないが、代わりに、この作品には批評精神が息づいている。さまざまな局面におかれた人物に成り代わり、貫之が歌を詠むこと自体、そこには自己を客観視する第三者の視点が導入されているからである。それに加えてこの作品の書き手は貫之自身ではなく、仮託された「女」である。その書き手は、さまざまな立場で詠まれた歌や、それを詠む詠み手の心情をまさに第三者として叙述し、批評していくことになるからである。

具体例を見てみよう。

(i) また、船君のいはく、「この月までなりぬること」と嘆きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

引く船の綱手の長き春の日を四十日五十日までわれは経にけり (5)

聞く人の思へるやう、「なぞ、ただ言なる」と、ひそかにいふべし。「船君の、からくひねり出だして、よしと思へる言を。怨じもこそし給べ」とて、つつめきてやみぬ。

(四二―四三頁)

(ii) この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、

a 寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾は

む (4)

といへれば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

b 忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思は

む

となむいへる。女子のためには、親、幼くなりぬべし。「玉ならずもありけむを」と、人いはむや。されども「死じ子、顔よかりき」といふやうもあり。

(四四頁)

(i) の場面では(5)の歌を詠む「船君」も、またそれを「聞く人」も貫之自身である。彼は船君がやつのこととひねり出したという歌(実際には自作の詠)を、聞く人の立場から、「なんとまあ、平凡でつ

まらない歌だこと」と何の技巧もない平板な歌であると冷静に批評させている。第三者の視点の導入によって旺盛な批評精神が発揮されている、といえよう。

(ii) の用例はさらに手が込んでいる。二月四日、和泉の灘から小津の泊りに向かう折、浜辺に打ち寄せる忘れ貝をめぐって、a b 二首の歌が詠じられる。この二首の歌は、諸注釈書が指摘するように『古今六帖』にどちらも貫之の歌として載っている。二首を別人の詠とした理由について菊地靖彦は、『船なる人』と『ある人』の歌の内容は、どちらも亡児を思う心情ながら、発想が相反するので、歌主を二人に分けたのであろう」と指摘する<sup>18)</sup>。

そしてさらにこの二首の詠歌をめぐって書き手である女が、「忘れ貝を拾おうといったり、拾いたくないといったりしている」親たちを「親幼くなりぬべし」と評し、第三者として亡くなった児が「珠というほどでもなかった」と努めて客観的な姿勢を装って批判を加え、その上で「死じ子、顔よかりき」と子を失った親たる者の心情・人情に言い及んでいる。ここでは何層にもわたる階梯的批評がなされていることに注意を払いたい。それを可能ならしめているのが、その場面に複数の分身を登場させる『土左日記』の手法である。

従来も『土左日記』の特徴として、社会批判や語戯を中心とした諧謔が指摘されている。だが本稿では、貫之が書き手を女に仮託して、自己を客観化する第三者の視点を導入したことが、「自照性」という内省的な姿勢でなく、詠者の立場を離れて、自作の歌に対する批評の

場を獲得せしめていることを確認したい。『土左日記』の女性仮託の叙法は、こうして旺盛な批評精神の発露を促し、作品の特徴を形作っているのである。

(2) 『和泉式部日記』の「われ」の用法

用例総数23例(内訳 和歌19例、会話11例(重複8例)、地の文1例)

(地の文の用例)

- ① 車をさし寄せて、ただ乗せに寄せたまへば、われにもあらで乗りぬ。  
(三三二頁)

『和泉式部日記』の用例は地の文に使用された1例を除いて、全て和歌と会話の中で使用されている。しかも地で用いられた1例は「われにもあらで(≡無我夢中で)」という慣用的な表現である。『和泉式部日記』の主人公は、「女いと便なき心地すれど」(二二頁)とあるように、「われ」ではなく、「女」である。その「女」の用例は、作品中に16例使用されている。それゆえ、この場面は「女は、我を忘れて宮の誘いに従い、車に乗りこんだ」ということをさしている。

そしてこの作品は「女は」と記す叙述の方法から、一部には和泉式部以外の作者を想定して、この作品は〈日記〉でなく〈物語〉として扱おうとする見解も出されている。しかし平安日記文学は、一人称の叙述ではなく第三者を想定して書くのが『土左日記』以来の伝統であ

ることが確認されれば、『和泉式部日記』は、むしろその伝統に従って、その叙法を最後まで貫いた作品といえよう。

その意味で、次なる作品を検討してみたい。

(3) 『紫式部日記』の「われ」の用法

用例総数11例(内訳 和歌1例、会話0例、地の文10例、但し「われら」1例を含む)

(地の文の用例)

他の人(8例)

- ① 殿の君達二ところ、源少将雅通など、うちまきをなげののしり、われたかうちならさむと、あらそひさわぐ。  
(二三九頁 源少将)

- ② 齋院に、中將の君といふ人はべるなりと聞きはべる、(中略)

いとこそ艶に、われのみ世にはものゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、  
(一九三頁 齋院の中將)

- ③ われはと思へる人の前には、うるさければ、ものいふことももの憂くはべり。  
(二〇五頁 我こそはと思っている人)

- ④ われはと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立居につけて、われ用意せらるるほども、その人には目とどまる。  
(二〇七頁 ④は「自分こそは」、⑤は「自分から気を配って

るときも」の意味)

- ⑥⑦ いと心よからむ人は、われをにくむとも、われはなほ、人を  
思ひうしろむべけれど、いとさしもえあらず。

- (二〇七頁 「いと心よからむ」気立ての良い人)  
⑧ かばかり濁り深き世の人は、(中略)。「それを、われまさりて  
いはむと、 (二〇七―二〇八頁 濁り深い世俗の人)

紫式部自身(心中語 2例、但し「われら」1例を含む。)

- ⑨ あはれなりし人の語らひしあたりも、われをいかにおもなく心  
浅きものと思ひおとすらむと、おしはかるに、  
(一七〇頁 私||紫式部)

(宮仕えにでたわたしをどんなにかあつかましく浅はかなもの  
と軽蔑しているだろう、と推量すると)

- ⑩ われらを、かれがやうに出でゐよとあらば、(中略)と、身の  
有様の夢のやうに思ひ続けられて、  
(一七九―一八〇頁 私たち)

本作の地の文で用いられている10例の内訳を調べると、「その人自身  
が」という意味で作者以外の他人に8例使用されている。作者自身  
に用いた用例は2例、しかもそれは心中語として用いられている。

このほかの地の文には、「われかしくなり」、「われさかしなり」、「わ  
れはがほなり」などの形容動詞のほかに、動詞の「われぼめす」、副

詞の「われもわれもと」が、各1語ずつ使用されている。

『紫式部日記』は、自照性のきわめて強い作品という特徴を持ちながら、そのほとんどの「われ」が「その人自身は」の意味で使用されており(80パーセント)、自分を叙することが主眼になってはいない。しかも作者自身に使用した用例も心中語であるということは、厳密に言えば作者は、自己自身を意味する「われ」を地の文では使用していないことになる。

『紫式部日記』といえば、独特な深い人間洞察と自己に対する真摯な内省が作品の特色として指摘されている。それ故この作品が「われ」という語を一人称の指標として用いようとしていないことはある意味で意外な発見といえよう。作者は何ゆえにそのような叙述のスタイルを採っているのか。その理由の一つは、やはり今まで見てきた『土左日記』以来の「われ」を主語にせず、三人称化して語る仮名日記の伝統が考えられる。それに加えて本作の場合は作品の執筆動機や意図との関係も考慮が必要である。執筆動機としては、式部の仕える中宮彰子、あるいはその父藤原道長の要請によるという説と、いや式部自身の自発性によるという説と、両説がある。しかしいずれにしても現存の『紫式部日記』の五分の三を占める内容は後の後一条天皇となる敦成親王の誕生をめぐる記事であり、この日記の主眼が王家の慶事を叙することにあつたと見ることに間違いはない。紫式部は主家の輝かしい盛儀を記すことを主眼に筆を執ったので、「われ」を叙することが本来の目的ではなかつたのである。執筆意図が作品の叙述方法を決

定している所以である。とすると『紫式部日記』は皇子誕生の記録を残すことを主眼としながら、その出来事に触発されてさまざまな感懐を催す自身の内奥に思いをいたさずにおられず、作者式部は自己の心情を凝視して、記録的な叙述の端々にその内省的心情をさしはさまずにはおられなかった、というのがこの作品の成立事情であり、特質であるということになる。

(4) 『更級日記』の「われ」の用法

用例総数18例(内訳 和歌2例、会話7例(重複1例)、地の文10例)

(地の文の使用例)

- ① 「われはこのころわろきぞかし。さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。(中略)」と思ひける心、  
(心中語 二九九頁)
- ②③ 父はただ、われ(私)をおとなにし据えて、われ(父)自分(は)は世にも出で交らはず、かげにかくれたらむやうにてゐたるを見るも、頼もしげなく心ほそくおほゆるに (三三四頁)
- ④ 父の老いおとろへて、われをことしも頼もしからむかげのやうに、思ひ頼みむかひゐいたるに、恋しくおほつかなくのみおほゆ。  
(三二六頁)
- ⑤ 馴れたる人は、こよなく、なにごとにつけてもありつき顔に、われはいと若人にあるべきにもあらず、またおとなにせらるべ

きおほえもなく、  
(三三〇頁)

⑥ ひとへにそなたひとつを頼むべきならねば、われよりまざる人あるも、うらやましくもあらず、  
(三三〇頁)

⑦ われもさ思ふことなるを、同じ心なるをかしうて(三三二頁)

⑧ さすがにきびしう、引き入りがたいふしありて、われも人もこたへなどするを、「まだ知らぬ人のありける」などめづらしがりて、  
(三三四頁)

⑨ 「(略)」と聞くに、ゆかしくて、われもさるべきを待つに、さらになし。  
(三三八頁)

⑩ 阿弥陀仏立ちたまへり。(中略) こと人の目には、見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくおそろしければ、  
(三五八頁)

『更級日記』の「われ」の用例は、18例のうち、地の文には10例あり、その内訳は、父のことが1例、作者9例、その内心中語1例となる。

本作は、冒頭に「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人(二七九頁)」として自己を三人称化して登場させ、そして作品の終わり近く、夫の死に際して自己の生涯を顧みる場面で、「かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德もつくらずなどしてただよふ。(三五七頁)」と叙し、起筆の筆と呼応した表現でやはり自己を三人称化し自身の生涯を総括している。このことから『更級日記』が一人称の語りとして執筆された作品ではないことは明白で

ある。

そこで次に地の文の「われ」の用法を調べてみると①が心中語であり、③が父のことであるので、作者自身を指し示す用例は8例。つまり①③を除く②④⑩までが検討対象となる。

その使用された場面を、大飼廉の構成区分<sup>⑨</sup>に従って見ていくと、一つの場面に集中していることが判明する。つまり「三、宮仕えの記」に7例あり、最後の1例が「五、晩年の記」に用いられている。「平安日記文学総合語彙索引」<sup>⑫</sup>によると、『更級日記』は全一七八〇行あり、作者が自分自身を一人称で叙述するのは②から、つまり作品開始から九七三行書き進めた時点で、初めてその叙法が取られたことが分かる。つまり作品が半分以上書き進められたときから、一人称表記が始まっているのである。しかも8例のうちの7例が、「三、宮仕えの記」に集中しているという特徴は、一考に価しよう。

今、その理由に言及する十分な備えはないが、確かなことは、『更級日記』も自己を三人称化して作品を書き始めたということである。それゆえ自分を「われ」として叙述するスタイルは、当初の叙法の逸脱としてなされているという点に注目したい。逸脱の理由として考えられることは、三人称で収まりきれない自我意識が頭をもたげたということであろう。それは、宮仕えの記という内容と関係していると考えられる。そこには上達部源資通との淡々しい関係が記されているので、作者はそのことを、「われ」の思い出として残しておきたいという願望が強かったと考えられる。

そのほかにも作品の成立事情との関係があったかもしれないが、その点についての考察は今後の課題にしたい。

#### 王朝日記文学の「われ」の使用方法についてのまとめ

以上、『土左日記』から『更級日記』までの五作品の「われ」という語の調査結果をまとめると、自己を叙述する文体を模索しつづけた平安時代の人々は、はじめに自己の客観化を図るべく、第三者の視点を導入していることが判明する。彼らは自分を第三者に仮託することによって、書き語る自己と、書かれ語られる自己を区別し、自己を客体化する道を切り開くことができたのではないだろうか。その中で、『土左日記』と『和泉式部日記』は、作者が設定した叙述方法を最後まで守り通し、自己をあくまで客観視した作品であり、『蜻蛉日記』と『更級日記』は、書くうちに切実な自我意識が頭をもたげ、『蜻蛉日記』は、途中から一人称の叙述に移行していき、<sup>⑬</sup>『更級日記』は三人称の叙述から逸脱して、一人称の叙法が一部取られた作品であることが判明する。また『紫式部日記』は、名家の盛事を書きとめながら、そこに浸りきれない自身の姿が自覚され、一人称の叙法は取らないが、折々の感慨を認めた作品と考えられる。とすると平安時代の日記文学にとって、三人称による自己の客観化は、自我の覚醒を促し、我と我が身について語る文体の獲得・実現に欠くことの出来ない姿勢であり、一つの過程であったといえよう。

Ⅱ、一人称で叙述する作品

次に一人称で叙述する作品に言及する。一人称「我」で始まる日記作品が、平安時代ではなく院政期から中世にかけて多く書かれたことは、久富木原玲がすでに指摘し、その理由を源平動乱の時代を生きた『建礼門院右京大夫集』を例にとり、次のように分析している。<sup>22)</sup>

大きな歴史の一大転換期においては、個人はそれに抗いようもなく洪水に押し流されるようにして生き、そして死んでいく。源平の動乱はこうして個人というものはかなさを人々の心に刻みつけ、だからこそ、その中で必死に生きた「我」の人生があったことを右京大夫は自ら確かめ、かつ「末の世」にも伝えたいと切望したのではなかったか。

この久富木原の指摘を受けて、筆者は自照性のきわめて強い中世の日記文学『とはずがたり』が愛用した「われながら」という言辞の使用例をたどることによって、中世日記文学に見られる自我意識の形成の問題を考察していきたい。

まず「われながら」とは、『日本国語大辞典』<sup>23)</sup>に「自分自身のことであるが」「自分のしたことであるが」「自分ながら」「わが身ながら」「われから」とあり、内省的な意味合いの強いことばである。一般的には王朝の日記文学は自照性が強く、中世の作品は記録的で、文学性に乏しいとされている。<sup>24)</sup> それゆえこの言辞は王朝の日記文学に散見

すると思われるのだが、その予測に反して、「われながら」は「われ」の使用例の検討によって明白であるように王朝の日記文学にはまったく使用されていない。前述のとおり、自己を第三者化して叙述するものが、この時代の日記文学の基本的なスタイルであったからである。

そこで次に「われながら」の用例を調査すると、『讚岐典侍日記』や『建礼門院右京大夫集』など院政期にかけて書かれた日記作品に散見し始め、中世になると次第に増え、そして『とはずがたり』には24例という、きわめて高い数値を示すようになる。<sup>25)</sup>

和歌の世界では十一世紀初頭に成立した『拾遺集』に初例があるが、中古ではあまり用いられていない。<sup>26)</sup> 『千載集』、『新古今集』に2首ずつ見受けられ、十二世紀後半から中世にかけて盛んに使用されるようになった。日記文学の使用例と同じ傾向が見受けられる。

「われながら」の用例は、森留美子によると『源氏物語』を始めとする物語の中に多く使用されていることが指摘されている。<sup>27)</sup> 具体的に『源氏物語』には18例の使用例が見出される。その一例を紹介しよう。

① あやしの心や、とわれながらおほさる。

(葵 三三三頁 14行 源氏の心境 草子地)

② 面瘦せ給へるかげの、我ながらいとあてにきよらなれば

(須磨 一三三頁 1行 源氏の感想 草子地)

③ まことや、われながら心よりほかなる猶ざりごとにて、うとま

れたてまつりしふしを思出さへ胸いたきに、

(明石 七八頁 14行 源氏の手紙)

④ われながらうとましけれ

(落標 一〇五頁 3行 紫の上が源氏に語る言葉)

『源氏物語』の「われながら」の用例を検討すると、①②の様に語り手が登場人物である光源氏に成り代わって自分の気持ちを物語る草子地の中で使用されているケースが多い。そして③の用例のように、登場人物が手紙の中で自己の心情を述べたり、④例のように紫の上が源氏相手に自己の心情を語ることばとして用いられたりしていることも判明する。

森が指摘するように中世の日記文学、特に『とはずがたり』は『源氏物語』からの影響を色濃く受け、この自照表現を作品に取り込んだものである<sup>28</sup>。『源氏物語』の中で、語り手が登場人物に成り代わってその人自身の心情を省みる叙法は、日記作者が自己を三人称化してその内面に迫っていく方法と、ベクトルはちょうど正反対である。しかしその叙述方法の行く先はいずれも内省の深化という点で一致しており、自分の半生を書くうちに個としての自我に目覚めていった日記作者が、『物語』の叙述方法で次第に確立された「われながら」の叙法を用いるようになっていったと考えられる。『源氏物語』の用法自体、始めは語り手が草子地で登場人物の心境を思いやり、ついで登場人物の心内語やさらには手紙の中で用いられ、最後に会話の中で自らを省

みながら心情を述べ、登場人物自身の内省語として使用されている。『源氏物語』の巻の成立には諸説があるので、現行の巻の配列から単純に「われながら」の使用の広がりや深化を推測するのは性急であるにしても、始めに語り手が草子地で使用するという第三者の視点を通しての叙述があり、その後手紙や心内語として使用され、さらに自分自身の内面を省み心情を述べるという順序が取られていることに注意を払いたい。ストーリーの展開に伴い多様化していく叙述の場面や用例数の増加が示している意味はないがしろにはできないのではないだろうか。

こうして「われながら」は院政期以後一般化され、自分自身が自らの内面を語る場面で次第に用いられるようになったのではないだろうか。我と我が身を振り返るこの語句は、時代の流れが大きく渦巻いた中世という時代に生きる人々の心を捉え、またこの時代の人々の心を映す時代の言葉になったことも用例の調査から明らかである<sup>29</sup>。

中世という変革期は、個の自覚を促した時代と言えよう。その意味で一人称の語りは、歴史や社会という荒波に飲み尽くされそうになった個人が、やむにやまれぬ思いから、「かく生きた」という生の証しを書き留めようとして、実現した叙述の方法といえるのではないだろうか。

### 三 愛する者の喪失と自我意識の形成

ためしたぐひも知らぬ憂きこと

〔建礼門院右京大夫集〕— 特異性・孤絶の主張

今まで、一人称の叙述方法に焦点をあてて、作者の自我意識の形成について考えてきた。今度は日記文学の内容、テーマから、その点について見ていきたい。

日記文学の重要なモチーフとして、父母の死・夫や恋人との死別など、愛するものを失う体験、喪失の悲しみが挙げられる。「ただ、あはれにも、悲しくも、何となく忘れがたく覚ゆることども」を、心にと覚えたまま、その折々に書き留めたという『建礼門院右京大夫集』もその例に漏れるものではない。源平の合戦で命を奪われた恋人平資盛を偲んで、その追憶に生きる自分の半生を歌日記の形で残した作品である。作者は其中で、自らの喪失の体験を繰り返し、繰り返し、「ためし類も知らぬ」ものと捉えている。

・さすが心ある限り、このあはれを言ひ思はぬ人はなけれど、かつ見る人々も、わが心の友は誰かはあらむと覚えしかば、人にも物も言はれず……様変ふることだにも身を思ふやうに心に任せで、ひとり走り出でなど、はたえせぬままに、さてあらるるが、かへすがへす心憂くて、

またためしたぐひも知らぬ憂きことを見てもさてある身ぞう

とましき

(二〇五番歌)

・なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢見ぬ人やいひけむ

(二二三番歌)

・かなしともまたあはれとも世の常にいふべきことにあらばこそあらめ

(二二四番歌)

・ためしなきかかる別れになほとまる面影ばかり身に添ふぞ憂き

(二二五番歌)

・定めなき世とはいへどもかくばかり憂きためしこそまたなかりけれ

(二二九番歌)

まず二〇五番歌の詞書では、都落ちをした平家一門のことを思い、心ある人はこの悲しい出来事を思わない人はいないがと断りながらも傍線部では「いつも会うかと思われ、心を割って話すことができなくなる心の友は誰がいようかと思われ、心を割って話すことができな

い」様子を述べている。そして自分の辛さを「ためしたぐひも知らぬ憂きこと」と例のないことだと表現しながら、かくまで特異で孤絶の辛さを味わいながらもなお生き延びているわが身を「うとましき」と詠じている。次の二二三・二二四歌は、ともに資盛の死が現実になった時の詠歌であるが、二二三歌では作者は、自分の悲しみと世間の人の無常とを区別して、「世のはかなきことをかなし」という人は、「かかる夢見ぬ人」と言い切り、自分の悲しみの類なさを強調する。続い

ての二二四歌でも、作者の悲しみを思いやって言葉をかけてくれた人に対して「なべてのことのやうに覚えて」と、通り一遍の弔問としか考えられず、「世の常にいふべきことにあらばこそあらめ」と世間一般の悲しさや哀れさと、自分の場合は違うと、反発心を抱かずにいられない。一方二二五番歌の詞書には、平家一門の人と契りを交し、「同じゆかりの夢見る人は、多くこそなれど」と記し、理性では「自分と同じ悲しい夢を見る人は大勢いるであろうが」と、自分と同じ辛い体験をしている女性の存在を認めている。しかし自分の哀しみに直面すると、それは「例なくのみ覚ゆ」と感じられ、「かく憂きことはいつかはありける」と言わずにはおられない。

自分は他者とは異なる特異な体験をしたという自覚や、自分の悲しみは他者には理解しがたいものだという意識は、当然一人称である「われ」の強調に行き着くことになる。本作の第一番歌は必ずしも集の最初に詠じられたものでなく、作品がかなりまとめられてから詠まれ、序として据えられたと考えられるが、

我ならで誰かあはれと水茎の跡もし末の世に残るとも（一 番歌）

と「自分の詠歌がもしも後世まで残ったとしても（私）以外の誰がこの集をしみじみと見てくれるだろうか」と歌い、作品全体が「われ」の忘れたい折々の詠草を集めた集であると宣言している。<sup>34</sup>

右京大夫は自分が味わっている悲嘆の重さに、「なくなりなばや」「こ

の世のほかにもしなばや」（二〇九番詞書・歌）と繰り返して死を望み、己の悲しくつらい出来事を忘れたいと願うがそれもかなわない（二二六番歌）。反面忘れてしまうことも悲しくあり（二二七番歌）、かくまでも悲しみながらなお生きながらえる自分自身の命もつらく思う（二一〇番、二三〇番歌）。そして次に引く二四三番歌では、悲痛に堪えかねて自ら死を望むわが身を「我ながらかなしける」と詠う。悲しみの淵に立たされて、嘆きに堪えかねているわが心を我ながらいとおしむ一首であり、本作で使用された唯一の「我ながら」の用例である。

・ 何事につけても、世にただ、なくもやならばやとのみ覚えて、  
嘆きわびわがなからましと思ふまでの身ぞ我ながらかなしかりけ  
る（二四三番歌）

問ふにつらさ（『とはずがたり』）——いたわりで癒されない心情

『建礼門院右京大夫集』からおおよそ七十年以上を隔てて成立した『とはずがたり』は、はっきりとした自我意識の下に作品が書かれている。作者後深草院二条は、冒頭で「われ」の語を用いてこれから執筆する内容がわが人生を辿るものであることを宣言し、引き続き語って語る後深草院から寵愛を得る場面では、その折の自分の心情を見つめ分析して「われながら」の語を用いている。<sup>35</sup> 極めて自我意識の強い作品である。その意味では本作の自我意識と、それを表現する手法は、先行する日

記作品や『源氏物語』などの手法によって、作品を書き始める以前に、形成され、獲得されていたということができよう。

しかしこの作品も『建礼門院右京大夫集』と同じように、自己の辛い悲しい心情を人から問われ慰められると、悲しみが癒されるどころかますます募ると訴え、その心情を「問ふにつらさ」と表現しているので、その点について言及しておきたい。『とはずがたり』において「問ふにつらさ」は作品の構想の上で重要な場面に絞る限定的に4例のみ使用されている。<sup>32)</sup> 二条も他者の慰めやいたわりでは容易に癒されない悲しみを生涯抱き続けた女性である。彼女は父の臨終正念を乱し「問ふにつらさ」の初例)、寵愛を賜った上皇の真情を測りかねて(第二例)、当時の貴族女性としては類例のない大規模な諸国行脚の旅に出る。二条は自分のうちの「問ふにつらさ」を「心の闇」と呼んでいるが、それだけの旅をせずには、自身の重荷を下ろし、心の闇を晴らすことができなかつたのである。

この作品の作者の「問ふにつらさ」がその生涯に及ぼした影響や、人にいたわられると悲しみの募る「問ふにつらさ」の心境から、人に尋ねられないのに語りだすという「問はず語り」の心境への変化がどのようにして起こったか、それらについてはすでに詳述したので、それを参看されたい。<sup>33)</sup>

#### 四 共感への希求

他者の同情や慰めを強く拒んできた建礼門院右京大夫と後深草院二条であるが、興味深いことには、心に大きな変化が兆したとき、二人は、自己の類まれな人生と達しえた境地を誰かに語りたい、聴いてほしいという希求を抱くようになる。両作品からその場面を引用してこう。

『建礼門院右京大夫集』から

・わが思ふ心に似たる友もがなそよやとだにも語り合はせむ

(三二六番歌)

『とはずがたり』から

・例の宵暁の垢離の水を前方便になずらへて、那智の御山にてこの経を書く。九月の二十日あまりの事なれば、峰の嵐もやや激しく、滝の音も涙あらそふ心地して、あはれを尽くしたるに、

物思ふ袖の涙をいくしほとせめてはよそに人の問へかし

(巻五、四〇一〜四〇二頁)

右京大夫は、自分と似た心の友を希求し、昔のことを懐かしんで「それそれ」という程度でも語り合いたいと願ひ、二条の方も物思ひの為に流した自分の紅の涙の袖を、幾度染め上げるとそのように色が濃い

のかと、せめてよそながらでも誰かに尋ねてほしい、と詠じている。彼らの心の変化は、どうして兆したのか。

『建礼門院右京大夫集』では、悲しみに沈んでいた作者はつらい思ひ出を残す京を後にして比叡坂本に下ったのである。そこで彼女にひとつの転機が訪れる。自然の中に身をゆだねて暮らすうちに、「星の夜の深きあはれ」をはじめ知る（二五二番歌）。久保田淳は、この場面を「人の心を悠久のかなたへと誘う星の美しさによって、作者の資盛追慕の悲しみがこの瞬間は途切れているようである」と評している<sup>④</sup>。このあと作者は自然の景物に思いを馳せるようになり、その中で資盛の思ひ出に浸るが、それ以前の他者を寄せ付けないような激しい慟哭は次第に収まっていく。

『とはずがたり』はいかがであろう。その経緯を詳述する紙幅がないので、結論のみを紹介すると、作者は諸国行脚の旅の中で父の菩提を弔うために五部大乘経の書写供養を行う。一方後深草院とは石清水八幡で再会を果たし、それを契機に自己の真情を院に訴え、院の臨終に際しては自らの命を引き換えにその回復を神に祈るに至る。その二条の祈りはかなわず、院は崩御し、二条は院と父との供養のために大乘経書写供養を続け、ついに熊野でその宿願が神に納受されたと確信するに至るのである。「問ふにつらさ」から「問はず語り」への心境の変化は、ここに兆したといえるのである。

右京大夫と後深草院二条、いや『蜻蛉日記』の作者も、『更級日記』の作者も、皆に共通することは、物語や諸国行脚の旅に出かけている

という経験である。作品によっては神仏による託宣や夢想も書かれているが、むしろ彼らは日常生活から離れ、自然の中で自己が開放され、心が癒されていく様子を叙している。またさらに重要なことは、彼らは自らの人生を書くことによって、自己実現を果たしていることである。右京大夫は、他ならぬ孤絶したわが人生を、二条は「問ふにつらさ」の、それぞれのつらい悲しい「たぐいなき」出来事を、書くことによって受け止め、受け入れ、まさに自らの人生そのものを生き直し、捉え返しているという事実である。『とはずがたり』は、まさに自らの「問ふにつらさ」を克服して「問はず語り」にいたる人生の軌跡を主題に据えたが、日記文学はいずれも、人から問われずとも語らずにいられない内発的な語りへと昇華していく過程が、作品に書き留め残されているのではないだろうか。

### おわりに

以上の考察、日本古典の日記文学における「われ」と「われながら」の使用例の調査によって明らかになったことを基に、自己の半生を叙述するという行為のうち内包する自他の関わりについてまとめておきたい。

中古女流日記は、女性に仮託するという仕方で仮名日記を創始した『土左日記』の叙述方法に学んで自己を三人称化し、書く自分と書かれる自己の区別を図り、自己を見つめる眼差しを獲得した。それゆえ

基本的には「われ」という自称表現を使用せずに、自分の生涯を叙する作品が多い。だが作品の中には、自分の体験を書き進めるうちに自我意識が芽生え、第三者としてではなく「われ」の思い出として日記を書き残したいという意識が表れ、自己表現が進展していったものがあることが判明した。それは『蜻蛉日記』や『更級日記』に顕著に現れている。自照性・自我意識の形成に、第三者の視点が重要な役割を果たしていたことが確認されたといえよう。

次に先行文学によってすでに自照表現を獲得し、自我意識の強い院政期ならびに中世の日記文学、特に『建礼門院右京大夫集』や『とほがたり』においては、当初他者と異なる自己の人生の特異性を強調する。しかし作品を書くことにより自己の人生を受け止め、また生き直すことのできた作者たちは、自分の半生を他者に語り、理解を求めたい思いが芽生え、そのことを自覚的に記している。今回取り上げた『建礼門院右京大夫集』と『とほがたり』にその特徴は著しく、他者の慰めやいたわりを拒絶し、癒されぬ思いに涙する気持ちからスタートし、他者の共感の希求に行き着くことが確認された。

とすると日本の日記文学の自照性は、①他者とのかわり、②物語や旅による神仏あるいは自然の癒し、③書くことによる自己実現、という三要素を介して、形成されていったといえよう。

最後に古典文学に現れた「自我意識」が、いわゆる「近代的自我」とどのように異なるのか、「近代的自我」とは一体何か、古代・中世の人々の自意識とそれはどの点がどのように異なるのか、本研究がそ

れを考える糸口になることを願って、稿を閉じる。

【引用テキスト】

傍線・傍点は断りのない限り筆者が施したものである。頁数、行数も同様である。

・土佐日記 『蜻蛉日記』 菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳（新

編日本古典文学全集 小学館 一九九五年）

・和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記『藤岡忠美・

中野幸一・犬飼廉・石井文夫校注・訳（新編日本古典文学全集 小

学館 一九九四年）

・『建礼門院右京大夫集 とほがたり』 久保田淳校注・訳（新編日本

古典文学全集 小学館 一九九九年）

・『中世日記紀行文学全評集成 第四巻 とほがたり』 西沢正史・

標宮子編著（勉誠出版 二〇〇〇年）

・『源氏物語』 柳井滋・室井信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・

今西祐一郎校注（新日本古典文学大系 岩波書店）

なお「われ」の用例検索に『平安日記文学総合語彙索引』 西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編（勉誠社 一九九六年）を使用した。

注

- ① 『土左日記』の作者は紀貫之であるが、女性に仮託して執筆し、女流日記文学の嚆矢と位置づけられているので、本稿でも考察の対象とする。
- ② 「日記文学の本質」『国文学』一九六五年十二月
- ③ FOLCROFT LIBRARY EDITION、一九七八年
- ④ 東京寶文館
- ⑤ 尚、モウルトンの著作の全訳としては『文學の近代的研究…文學の理論及び解釈の序論』本多顕彰訳 岩波書店 一九三二年がある。
- ⑥ 『日本文学大辞典』は、文学作品を四つの形態の差別によって抒情文学、叙事文学、劇文学、自照文学と分類し、自照文学を次のように説明している。「抒情文学的なるものと、叙事文学的なるものとが結合し、詩歌ほど主観的でなく、また小説ほど客観的でなく、個性的自我の覚醒に基き、静観的精神より生み出された文学を自照文学と云ふ。日記・随筆・試論・批評・證論等の文学で、反省する心の自己反省、即ち自照的心境を開拓し、観照的観念的特性を持つ。体験と思索とによって現実を諦観せる文学であり、素材は経験的現実的なるものに限定される。
- ⑦ 『中世女流日記文学論考』（和泉書院 一九八七年）、第一章「自照文学」としての「日記文学」
- ⑧ 筆者がそのような問題設定を行った背景には、近代キリスト教社会で言及された「Reflection」と、日本日記文学の文学性の指標の一つである「自照文学」あるいは「自照性」という概念が、果たして同質のものなのか、という疑問もある。それを考えることが、古代中世の人間の自意識と近代的自我との間に大きな差異があるか否かという、問題意識に迫る手がかりにはしなないと考えるからである。良く言われることだが、キリスト教思想に根ざした西欧社会にあつては、個の意識の確立は、神の前に立つ人間として存在のあり方が問われ、自我が形成されてきたとされ、一方絶対他者を持たない日本人に同じような個の自覚があるのか、という問いが突きつけられる。おそらく本稿はその問題意識にたどり着く前段階の調査報告に終始してしまふであろうことを、あらかじめお断りしながら、日本のしかも古い時代の人間の自我意識の形成がいかなされたのか、中古・中世の日記文学における「われ」の用法の特徴を考察していきたい。
- ⑨ 「日記紀行文学の諸相」一五八頁 『岩波講座日本文学史 第五巻』所収（岩波書店 一九九五年）
- ⑩ 『紫式部日記』には、所有を示す「わが」の用例は17例あり、そのうち7例が式部自身の立場から用いている。だが、この語は「自分

の、その人自身の」の意で使用されるケースも多いので、今回の考察対象からははずした。今後の検討課題である。

- ⑪ 前掲注⑨久富木原論文 一五九頁
- ⑫ 『増補史料大成』所収（臨川書店）
- ⑬ 『増補史料大成』所収（臨川書店）
- ⑭ 『増補史料大成』所収（臨川書店）
- ⑮ 稲村栄一『訓注 明月記』第一巻（松江今井書店）
- ⑯ 『土左日記』1例（会話 童）、『蜻蛉日記』2例（会話 道綱・童装束するもの）、和歌1例（道綱）、『和泉式部日記』1例（会話 宮）、『紫式部日記』3例（会話 2例道長、1例北の方）、『更級日記』1例会話（親）、1例和歌（父の代詠）
- ⑰ 新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』解説 六七頁
- ⑱ 前掲注⑰書 四四頁 頭注
- ⑲ 犬飼廉 新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』の本文区分に従った。
- ⑳ 注⑲の犬養廉による文章構成を『平安日記文学総合語彙索引』の行数によってまとめてみると、次のようになる。一、上洛の旅（一～三五二行）、二、家居の記（三五三～九七〇行）、三、宮仕えの記（九七一～一三二二行）、四、物語での記（一三二二～一六四二行）、五、晩年の記（一六四三～一七八〇行）
- ㉑ 『蜻蛉日記』については、稿を改めて考察する。
- ㉒ 前掲注⑨久富木原論文 一六一～一六二頁
- ㉓ 第一版（一九七二年）、第二版（二〇〇二年）ともに。（小学館）
- ㉔ 永積安明『中世文学の展望』（東京大学出版会 一九五六年）、松本寧至『中世女流日記文学の研究』（明治書院 一九八三年）など。
- ㉕ 拙著『とはすがたりの表現と心 「問ふにつらさ」から「問はず語り」へ』（聖学院大学研究叢書7 聖学院大学出版会 二〇〇八年）から「われながら」の使用例を挙げておく。平安時代の日記文学（用例なし）、『讃岐典侍日記』1例、『建礼門院右京大夫集』1例（和歌）、『うたたね』2例、『たまきはる』2例、『源家長日記』1例、『無名草子』3例、『とはすがたり』24例（内1例は会話文）、その内訳は巻一6例、巻二4例、巻三6例（内1例は会話文）、巻四4例、巻五4例、『中務内侍日記』6例である。
- ㉖ 『新編国歌大観』で検索すると、藤原元真・源順・藤原相如・藤原実方・清少納言・和泉式部・相模の七人が各1首ずつ詠じているだけである。
- ㉗ 森留美子「とはすがたり」における自照表現の再検討―語り手の存在に注目して―『名古屋大学国語国文学』58 一九八六年七月
- ㉘ 前掲注⑲森論文
- ㉙ 前掲注⑲拙著
- ㉚ 『建礼門院右京大夫集』の「われ」は、詞書に7例、和歌に8例、使用されており、そのうち作者自身を示す用例は、詞書4例、和歌7例である。
- ㉛ 前掲注⑲拙著 第四編第一章「起筆部に見られる語りの姿勢」、な

らびに第五編第二章「なほも心のありけるにや」考——その自照表現のもたらされた背景を探る——」

③② 前掲注②拙著 第一編第一章「問ふにつらさ」から「問はず語り」へ——問題提起」

③③ 前掲注②拙著 終章第三節「前後編を貫くもの——主題・構想・執筆動機——」、第四節「主題ならびに「問はず語り」への転換点」

③④ 久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集 とはずがたり』一二七頁  
頭注

# The Formation of Self-Consciousness in the Diary Literature of the Heian and Medieval Epochs

Miyako SHIMEGI

In this paper, in order to confirm the relationship between the ego and the other, I checked the words of self-expression, “Ware”(I) and “Ware-nagara” (even I), featured in Diary Literature which is autobiographical. In the four diary works of the Heian Epoch there aren't many examples of “Ware”, the word indicating oneself, and there are no examples of “Ware-nagara”, the word meaning the spirit of self-reflection. Moreover, uses of the word “Ware” in works of the Heian Epoch differ remarkably.

On the other hand, in medieval epochs, self-consciousness arose and uses of “Ware” and “Ware-nagara” increased. This means that, in the diary works of the medieval epoch, each author emphasized the unique character of his or her life. The authors reject the other but, in writing diary literature, they reconsider their lives and seek sympathy by narrating their lives to others.

---

**Key words:** self-consciousness, self-expression, self-reflection, *Ware* (I) and “*Ware-nagara*” (even I), diary literature, autobiography, unique character